

また泣いてしまいました

校 長 武井 正明

あっというまの一日が終わった。気づくと夕暮れが心地よい。
皆本当によく頑張った。おかげで素晴らしい一日となりました。
総て競技を終えて迎えた閉会式。
私は最後に皆に言葉を掛ける時、いつも感極まってしまう。
それはなんでだ？



それはもう私にはどうしても取り戻せない、大切な青春時代のド真ん中の美しさを魅せつけられるからだ。美しいものには感動してしまう。

自軍の勝利のために、声を枯らして力の限り応援する。

少しでも前に、速く走りたい。次の仲間にとにかく繋ぐんだ。その真剣な眼に痺れる。競技中、ケガをしてしまった仲間の傍に、ただ付いている優しい彼。言葉はいらない。後半は取り返すぞ、と息巻いて笑顔を向ける彼女…。

現実というのはとかく残酷なものだ。私は生徒が真剣に取り組んだ結果に「教育的配慮」は、寧ろ無用だと考えている。

今日の勝利の女神は悉く青軍に微笑んだ。学年競技は赤軍が一矢報いた。

緑軍だけは、最後まで何も来なかった。

悔しい表情で下を向く子ども達。君たちは頑張った。

これを見ていたら堪らなくなった。

「嬉しい涙も、悔しい涙も、本気でやって涙を流せるというのは素晴らしいことだ、幸せなことだ。だから君たちの青春時代、中学時代にマイナスなどひとつもない、全部プラスなんだ…」

思わずそんなことを口走った。



閉会式が終わったら青軍責任者の彼の呼び掛けで、軍の垣根なく皆でコールが始まった。



皆の笑顔が弾けて、声が響き渡る。私には君たちが眩しすぎて、よく見えなかった。

緑軍団長のあなた、一番手はやってみてどうだった？きっと何物にも代えられない、貴重な経験だったと思うよ。きっと君は、またひとつ確実に大人の階段を上ったはずだ。

なんとも気分のいい、秋晴れの爽やかな一日が心地よい疲れと共に終わっていく…。

やっぱり吉中の君たち、最高だわ。可愛い俺の孫たちよ、大好きだ。

俺も寿命が10年伸びた。まだ秋はこれからが本番です。皆で楽しい秋にしようね。